

39 ガレノスとヴェサリウスの

解剖学の比較研究(二)

—第三・四対の脳神経を例にとつて

坂井建雄

ヴェサリウス Vesalius (1514-1564) は『ファブリカ』の脳神経の記述にあたって、ガレノスの『身体諸部分の有用性』と『神経の解剖について』を参考にしたと考えられる。脳神経の記述を含む『解剖手技』の後半部分で、ギリシャ語で伝存していないからである。『身体諸部分の有用性』には May (1968) による英語訳がある。また『神経の解剖について』は Goss (1966) による英語訳があり、坂井・池田・月澤が日本語訳を行っている。

ヴェサリウスの『ファブリカ』に含まれる脳神経、とくに第三対と第四対の記述に、ガレノスの両書の内容がどのように反映されているかを比較検討した。ガレノス

が同定した七対の脳神経は、現代の解剖学による一二対の脳神経と以下のように対応する。

「ガレノスによる
脳神経」 「現代の解剖学による
脳神経」

第一対 視神経 II

第二対 動眼神経 III

第三対、第四対 三叉神経 V

第五対 顔面神経 VII、内耳神経 VIII

第六対 舌咽神経 IX、迷走神経 X、

副神経 XI

第七対 舌下神経 XII

ヴェサリウスの『ファブリカ』では、第四巻が末梢神経を扱い、その第四章から第一〇章が七対の脳神経を扱っている。またこれらの章に先だつて、脳底を示す図と、脳神経の外観を示す図が掲載されている。また第一巻は骨を扱うが、その第二二章は頭蓋の孔を扱っており、脳神経の通路についての記述が含まれている。『ファブリカ』の第一巻には、Richardson ら (1998) による英語訳がある。

ガレノスによる第三対の脳神経は、おおむね三叉神経の第一枝（眼神経）と第三枝（下顎神経）に相当する。

第四対は、『身体諸部分の有用性』では大・小口蓋神経（三叉神経第二枝から分かれる）に相当し、その後執筆された『解剖手技』および『神経の解剖について』では、これに加えて交感神経幹（およそ内頸動脈神経）が含まれる。ガレノスは、各脳神経について走行の全貌を観察していないが、部分的な観察の記述からどの脳神経を観察したかは確実に同定できる。

ヴェサリウスによる第三対の脳神経は、小さな根と大きな根に分かれる。小さな根は、ほぼ三叉神経の第一枝に相当し、上眼窩裂を通過して眼窩に侵入するが、その枝の一部について奇妙な記述がある。この神経の枝の一つが、下眼窩裂を通過して側頭部に抜けて側頭筋を支配するという。しかし実際にはこのような走行をとる枝はなく、側頭筋を支配する枝は三叉神経の第一枝ではなく第三枝から分かれる。

ヴェサリウスによる第三対の脳神経の大きな根は、ほぼ三叉神経の第三枝に相当し、卵円孔を通過して頭蓋腔か

らであるが、その枝は下顎骨の内部および舌の粘膜に分布すると図に描かれている。しかしこの根から、上顎の歯に分布する枝が分かれるように描かれているが、これは実際には、三叉神経の第二枝から分かれるべきものである。

ヴェサリウスによる第四対の脳神経は、口蓋の粘膜に分布すると図に描かれている。これは、実際には三叉神経の第二枝から分かれるものである。ガレノスの『身体諸部分の有用性』の記述に対応している。

ガレノスの脳神経の記述のうち、第三対と第四対はもともと不正確な部分である。ヴェサリウスの『ファブリカ』での脳神経の記述および図解は、第三対と第四対に關しては、人体の解剖所見を図示したものではなく、ガレノスの断片的な記述を、想像によってふくらませて図解したものである。

（順天堂大学医学部解剖学教室）